

つよからぬ風を氣遣ふ浮巢哉

青すたれ懸て聞けり水の音

何かなど思ふ夕部を初かつを

山道へかゝる境の新樹哉

花よりもこほれ安さよ桜の実

水あれば日影もとく茂りかな

尿かけて鼠の逃し紙帳哉

はつ裕只居るまゝに後れけり

鶯のなくかた向てころもかへ

今朝みれば切た跡なり宿のけし

石菖の水かけたれは匂ひけり

友すれのあとさへみえず今年竹

飛魚の上や静にゆく螢

有々とつかけさして夏の海

すしの香や雨の侘寐の枕もと

鶯や柳かくれに夏は来し

夕かほや木部屋の壁の鼠穴

宿えらみしたれは遠し鶉の篝

卯の花に向あふ闇の戸口哉

かさらすに身の取しまる裕かな

かたひらや鳥かけもなき日の最中

人こゝろ長し短し夏羽織

里の夜は雀に明て麦の秋

人からもそれとしれるや白扇

蓬生や葺たあやめも馴々し

親と子の顔見合せて田植うた

けし提て心遣ひや市の中

六月も咲花のある川原哉

置よりも釣をけしきや螢籠

家見ゆるかたへ流るゝしみつかな

草木にも親しく成し裕哉

山こして来た目に余る牡丹哉

京を出て見上る空やほとゝきす

同じ色に跡もつゝいて杜若

星はかり見えて涼しき夜明哉

人ことに算ほめけり仏生会

是にさへかけんの有や冷し瓜

友ゆれのせぬけしきなり芥子花

大夢

思風

茶雷

菊甫

泰山

青池

宇逸

龍岳

双鳥

少哉

悠々

大夢

慶里

素明

茶山

乙良

瓊山

新甫

二丘

水竹

自厚

御風

唼風

二葉

撫泉

大古

雲涯

素山

卓堂

金用

禾月

一止

樗影

禾山

浪うめ

遜阿

梅月

児川

露けしや新樹の奥の窓明り

祭見や都はものにしほらしき

蚊はしらや崩るゝ物と見てしはし

入梅にこゝろつきけり炉のけふり

興不興なくて若葉の離れ山

木隠れに宵々見ゆる蚊やり哉

みしか夜の枕にちかき算かな

身をよせる野中の松や風かをる

雨こほしくもあへす杜宇

卯の花をつふやく闇やぬかり道

常にさす朝日なけとも青すたれ

行戻り此川筋や子規

釣人のわたくし道や行々子

夕立や峰ふり分る雲の脚

いさゝかな木に日を染る清水哉

卯の花や二人並へは袖すれる

ほとゝきす聞き過より夜のしらむ

昼かほやこゝそと思ふ蔭もなき

田にあらす畠にあらす行々子

海の日のみえて涼しき舎かな

さみたれや今日はくゝと人こゝろ

むかし祖翁の我里に残されし

絶章を石に彫て造立せんと久し

く心に懸られたるにこ度とみに事

を成し得たる晴霞老嫗のこも

くさちあるをほきて

里ふりてうたも

名に負ふ田植かな

そのかみ翁の碑を営まんと思ひ起

せしより心に隙はなけれとも其石を

得るの左は易からぬのみかまかつみのさ

はり事さはにて怠るともなきいめの

うちに三そとせ余り徒らに過こしつる

かこそその夏門人誰かれつとひておのれか

終に行の句を丈はかりの石に彫りて

建りければ日比の思ひ己を責て今は束

の間もまたし難くて子におほせ門生に

丁酉

英泉

里水

布三

鳳毛

春齋

静夫

愛山

壯山

文起

一宣

雨石

霞石

忠之

丁遊

一之

梅霞

ミツ良

時考

春路

東明

清民